

高等学校「家庭科」における保育体験学習の教育的効果と課題

尾城 千鶴 埼玉県長期研修生 (現 埼玉県立栗橋北彩高等学校)
吉川はる奈 埼玉大学教育学部家政教育講座

キーワード：保育、保育体験学習、高校生、家庭科

1. 問題と目的

近年、少子化や児童虐待の増加などから、子育て支援の強化や親教育の必要性が求められている。家庭の教育力の低下や、少子化により乳幼児と触れ合う機会の少ない高校生も多く、高等学校の家庭科における保育学習は、ますます重要になってくるとされる。家庭科学習指導要領の保育に関する領域では、乳幼児と直接触れ合う体験を通して学べるように工夫することが求められている。伊藤は「親性」を「次世代の再生産と育成のための資質」とし、段階的に「親性準備性」を形成していく必要性を指摘している。保育体験学習は高校生にとって、効果が大きいとその成果は蓄積されてきている(中嶋ら)が、実際に実施する際には様々な問題点も生じ、課題も多い。本稿では、各高等学校における保育体験学習の取り組みについて質問紙調査を行い、実施の現状と効果及び問題点を明らかにしていきたい。とくに保育園、幼稚園での体験的学習、いわゆる実習部分の実態だけでなく、その前後の学習、事前指導、事後指導の具体的内容も含め、明らかにしていきたい。

そのうえで、高校生の保育体験実習の実習先の幼稚園教諭に回答してもらった具体的記述や保育体験学習を行った高校生の感想をとりあげ、保育者の意識や生徒の実習の受け止め方を踏まえながら、今後の効果的な保育体験学習の在り

方について考察していきたい。

2. 方法

2-1 調査対象

保育体験学習がどのように行われているのかを調べるために、現職の高等学校の家庭科教員を対象に質問紙調査を行った。

S県内の全日制の県立高等学校、市立高等学校151校に郵送により配布した。回答は家庭科教員にお願いをし、終了後、郵送してもらった。

2-2 調査時期

平成22年1月～平成22年2月

2-3 調査方法

質問紙調査法による無記名自記入式で、各項目について選択または記述で回答してもらった。質問紙は郵送による方法で行った。回収率は、60.3%であった。

2-4 調査内容

調査内容は以下の①～⑪の項目である。質問内容によって選択式のほか自由記述部分を含んでいる。

①対象者の所属

②年齢、経験年数、現任校の在職年数、1週間当たりの授業時数

- ③家庭科の必修科目、選択科目
- ④保育体験学習の有無
- ⑤保育体験学習の位置づけ、実習先、回数、時間、対象生徒の人数
- ⑥時間割の変更の有無、引率教員の数
- ⑦実習の内容、事前学習、事後学習の内容
- ⑧実習に行く前の生徒の様子
- ⑨保育体験学習が実施できない理由
- ⑩保育体験学習の問題点
- ⑪生徒全員が保育体験学習を実施することについての意見

3. 結果と考察

3-1 対象者の属性

図1は回答者の教員の年齢構成を示す。20代、60代はわずか1%と少ない。一方で30代が27%、40代が47%、50代が24%と多く占めた。

図2は教員経験年数である。16~20年が最も多かった。現任校の在職年数は、3年~7年が多かった。

図3は現在勤務する高等学校での勤務年数である。着任したばかりからそうでないものまでばらつきのある結果となり、回答者の属性として適切であることが確認できた。

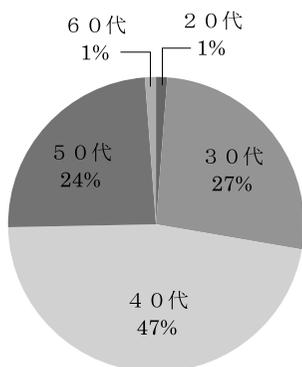


図1 年齢構成

3-2 家庭科の科目種別

表1は家庭科の必修科目について回答をまとめたものである。家庭総合が58校、家庭基礎が33校であり、家庭総合が多かった。しかし家庭基礎が以前より増加しているのは時間数が十分でない状況をつくることになり危惧されるところである。

表2は選択科目についての回答をまとめたものである。フードデザインが最も多く、次いで発達と保育、被服製作、服飾手芸の順となつて

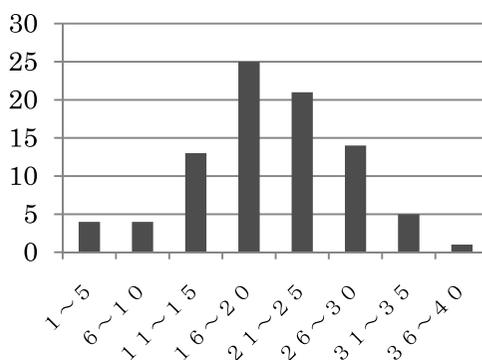


図2 経験年数

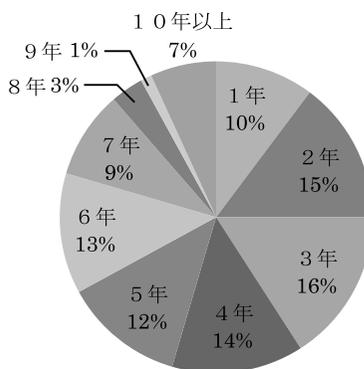


図3 現任校での勤務年数

表1 必修科目

家庭総合	58
家庭基礎	33

表2 選択科目

フードデザイン	71
発達と保育	48
被服製作	21
服飾手芸	11
家庭看護・福祉	11
被服	7
服飾文化	5
児童文化	6
リビングデザイン	4
調理	2
ファッションデザイン	2
手芸	1
食文化	1
生活産業基礎	1
食品衛生	1
栄養	1
食品	1
消費生活	1

いる。その他、被服、服飾文化、児童文化、リビングデザインなどを実施している。

3-3 保育体験学習の実施状況

表3は保育学習の中で保育体験を実施しているか否かをたずねた結果である。保育体験を含む保育体験学習を行っている高校は、53%にあたる48校、行っていない学校は43校となりほぼ1:1の数となっていた。

表4は保育体験学習をどの時間に行っているかについてたずねた結果である。家庭科の必修科目での実施は9校、家庭科の選択科目（発達と保育、児童文化）では31校と全体の中でもっとも多かった。その他、ボランティア体験、職業体験、総合的な学習の時間で行われているほか、部活動などで実施されていた。家庭科の必修科目で行っている高校については、全体の10%とまだ、少数だった。しかし、実施のすべての高校が家庭科の時間だけで実施しているのではなく、家庭科以外の職業体験やボランティアの時間にも保育体験学習を行っており、これらは、実習の引率の教員を家庭科以外で複数配

表3 保育体験有無

あり	なし
48	43

表4 保育体験学習の実施分

家庭科(必修)	9
家庭科(選択)	31
総合的な学習	2
職業体験	7
ボランティア体験	13
その他(部活など)	2

複数回答可

置するなど学校全体として取り組んでいた。理解があり、校内の支援体制が整っていることがうかがわれる。

3-4 保育体験学習の実施形態

表5は保育体験学習の実施形態についてまとめたものである。実習先については幼稚園と保育園両方いう項目が最も多かった。実習回数については、1~2回が多かった。時間は2時間~半日または1日という回答が多かった。実習期間が2日以上という場合は職業体験で行っている場合がほとんどである。

一回の実習で実習を行う生徒数は、10~20名が多い。あまり、人数が多いと受け入れが困難なようである。時間割の変更は行っていない学校が多かった。引率教員は1名が最も多かった。ボランティアや職業体験で実施する場合は、引率教員は複数となっている傾向が見られた。

3-5 保育体験学習の実習内容

幼稚園や保育園のカリキュラムに沿って、実習を行うという回答が多かった。具体的には、保育士の仕事の補助、園の見学、子どもたちと一緒に遊ぶという内容であった。

また、絵本や紙芝居、エプロンシアターなど生徒が事前指導の時間の中で作成してきたもの

表5 保育体験学習の実施形態

実習先	幼稚園	11
	保育園	12
	幼稚園と保育園	21
	その他	5
回数	1回	27
	2回	13
	3回	3
	4回以上	4
時間	1～2時間	16
	半日	8
	1日	11
	2日以上	9
1園あたりの参加人数 (1実習あたり)	1～5	1
	6～10	5
	11～20	13
	21～30	6
	クラス全員	3
時間割変更	あり	7
	なし	39
引率教員数	1人	29
	2人	5
	3人以上	4

実習先のその他は、児童センターや学童保育等

を園児の前で発表するという内容が多かった。

さらに作成したおもちゃで一緒に遊んだり、給食を一緒に食べるという記述も多かった。

その他、運動会やプール遊びなど園の行事の手伝いや園の掃除や草取りという内容もあった。親子交流会や保護者との懇談というような保護者との関わりもあった。

実習前の授業で作成したものを園で披露したという内容も多かった。

保育専門の学科では、ピアノ伴奏や絵本の読み聞かせなどの部分実習を行っていた。

3-6 事前指導と事後指導の内容

(1) 事前指導

保育体験学習の事前指導、事後指導の内容について自由記述で回答してもらった(表6)。記述は、「実習の注意、心構え、手続き」「園の説明」「子どもの発達」「製作活動」「実技練習」「その他」の6つに分類することができた。事前指導として最も多かったのが「実習前の注意、

心構え、」「服装、態度、マナー」「安全」などの指導である。外部の機関に生徒を実習にだすには、相手先に失礼がないように態度やマナー、服装、言葉づかいに重点を置く。そして、感染やけががないように安全に実施することを最優先としている。今回はインフルエンザで実施できなかった学校が何校もあった。

「園の説明」では、園の概要の紹介、保育方針の説明などについては少なく、ビデオによる学習が多かった。「子どもの心身の発達の特徴」「発育、発達」の記述もあったが、「おもちゃの製作」「おみやげの製作」「絵本、紙芝居の製作」「名札の製作」など、事前学習に製作活動を取り入れている学校が多くみられた。それと合わせて、製作した作品を使って、子どもたちの前で演じるための練習の時間を事前学習の時間にあてていることも多かった。製作活動を通して、子どもたちと楽しく遊ぶ方法を考える時間にもなるが、授業時間が不足する中での製作活動は、時間がかかりすぎるという欠点もある。子どもと遊んだ経験のない生徒に、おもちゃや絵本、紙芝居を考えさせるのは、大変なことのように思われるので、この点は、今後、検討していく必要があるように思われる。全体的には、製作活動とその練習に多く時間をかけており、子どもの発達の特徴など子どもを理解するための時間がやや不足していることが分かった。

(2) 事後指導

事後指導(表6)では、「記録」、「発表」、「お礼」、「製作」の4つに分類できた。

お礼の手紙を書いたり、プレゼントを作成して園へ届けるというような感謝の気持ちを園へ伝えるという事柄も多く、このことは、社会通念からも大切なことであるといえる。

事後指導の時間そのものが少ないという状況に加え、事後指導は記録の作成の時間がほとんどを占めている。したがって、他の生徒の意見を聞くなどの機会は少なく、同じ実習の中で他者がどんな体験をしたのか、どのように感じたのかを知る機会がない。実習を通して互いに高

表6 保育実習の事前・事後指導

実習先	幼稚園	11
	保育園	12
	幼稚園と保育園	21
	その他	5
回数	1回	27
	2回	13
	3回	3
	4回以上	4
時間	1～2時間	16
	半日	8
	1日	11
	2日以上	9
1園あたりの参加人数 (1実習あたり)	1～5	1
	6～10	5
	11～20	13
	21～30	6
	クラス全員	3
時間割変更	あり	7
	なし	39
引率教員数	1人	29
	2人	5
	3人以上	4

実習先のその他は、児童センターや学童保育等

めあう時間が必要であると思われる。また実習時に生じる疑問を、生徒が解決する時間も事後指導に必要と思われる。

3-7 保育体験学習の効果

保育体験学習の効果についての自由記述では、ほぼ全員の記述が、保育体験学習は、効果があるとの記述があり、認識していた。記述の例としては、「心の教育につながる」「親の役割や責任を考えることができる」「今まで育ててくれた人への感謝の気持ちが出る」「子どもの発達を見ることで、自分の成長について振り返ることができる」「子どもと実際に触れ合うことで、子どもの理解が深まる」などがあつた。

3-8 保育体験学習の実施上の問題点

保育体験学習を実施できない理由(図4)として、もっとも多かったのが、「保育体験学習のための時間が取れない」であり、次いで、「生徒の人数が多すぎて連れていけない」「近く

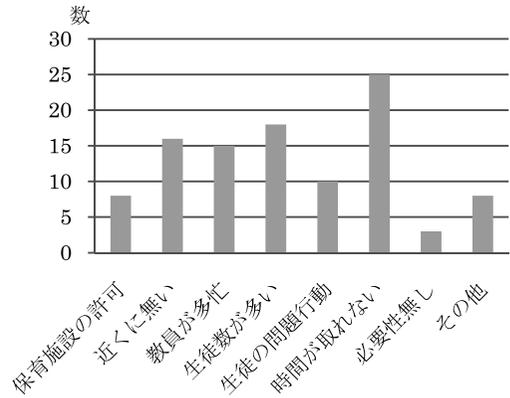


図4 保育体験学習を実施できない理由

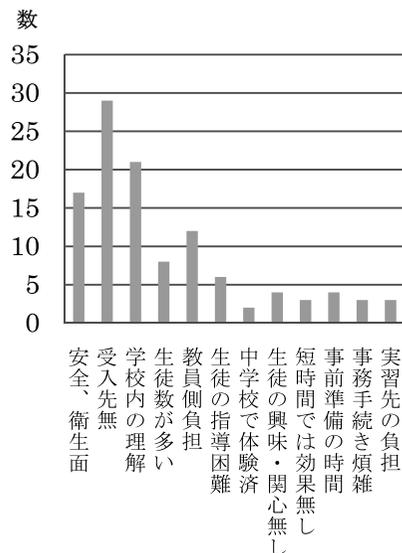


図5 保育体験学習についての問題点

に幼稚園や保育園がない」であつた。他には、「生徒が問題を起すのではないかと思って連れていけない」などがあつた。その他の項目の中には、「インフルエンザの影響で連れていけない」などがあげられた。

全員に、保育体験学習実施についての問題点を記述してもらつた(図5)ところ、多かつた事柄は「受け入れてくれる園がない」や「学校内での理解が得られない」などであつた。

他には、「教員側の負担が大きい」という記

述も多く、調理や被服の実習の準備に時間がいかかり、保育実習のための時間が取れないと現状もみられる。また、「安全・衛生」面での不安や問題点も多くあげられている。生徒のマナーや服装、態度の徹底についても困難であるという記述もあった。また、中学校で実施してきている場合も多く、今後は、中学校との連携も必要ではないかという記述もあった。「生徒の興味、関心がない」「短時間では効果があがらない」「実施しても効果があるかわからない」なども記述されていた。他にも、受け入れ側である幼稚園や保育園に負担がかかってしまうのではないかという心配あげられていた。また、事前、事後の指導をどのように行うかが問題で、園に行き、ただ、楽しただけで終わりにしては効果がないという意見もあった。

3-9 保育体験学習受け入れ先の保育者の意識

実習を受け入れる側である保育者がどのような感想を持っているかを知るために、受け入れ先の保育者に終了後感想を記述してもらった。「高校生は、緊張しながらも子どもたちに話しかけて触れ合いを持とうとし、笑顔で一緒に楽しく遊んでいて良かったです」「最初は、緊張していた高校生が帰る時は、笑顔だったり、やさしく接していたり、たくさんの変化が見られて、短い時間でも子どもたちと接することで、こんなにも何かを感じてくれたんだととてもうれしく思いました。」「子どもたちの目線に立ち、一緒に遊んだり、話しをしてくれたりしていました」「積極的に子どもと関わっていた」「1時間の短い中でも、最初は笑顔のなかった高校生が帰り際には、すごく笑顔で楽しかったと言ってきて、良かったなと感じました」「来た時と帰る頃の高校生の表情が変わったのが印象的だった」などの感想が多かった。保育者側からは、「たとえ短時間でも子どもとの交流は効果がある」と考えていることがわかる。子どもにもたらす効果として、「子どもたちは、高校生

が来ることを楽しみにするようになりました」など遊びへの良い影響があるとも指摘する。「子どもたちがうれしそうに遊んだり、会話をしている姿が印象的だった」や「お兄さんお姉さんが来てくれることで普段お友達と自分から関われない子や控えめな子も自分から進んで関わっていく姿が見られたり、お兄さん、お姉さんがたくさん遊びを通して関わってくれることで子どもたちも満足ようです」「先生とは違う遊びをしたり、特にお兄さんは、子どもたちは園の中で男性と触れ合う機会もあまりないためか、うれしいようです」「お兄さん、お姉さんってすごいなと感じる場面もあったようです」という記述があり、保育実習の効果は、高校生だけでなく、子どもたちにとっても効果があり、触れ合うことにより、互いに育ち合うということ、人間関係の広がり可能性を指摘する。「子どもたちと接することで、大切にしたい気持ちを感じてもらい、子どもに向けた目を変えていってほしい」「子どもの個性に気づいてほしい」「子どものかわいさを知り、親になることに期待を持ってほしい」という高校生に対しての保育者の願いも感じ取られる。さらに、受け入れる側からすると、保育士や幼稚園教諭は、女性の先生が多いので、男子高校生ならではの遊びは、子どもたちにとっても新鮮でもあり、良い遊び経験とも指摘していた。保育者の感想から送る側の立場である家庭科教員と受け入れる側である保育士との間に問題点や効果など共通点や相違点もみられることが分かった。保育者の感想は、今後の効果的な保育体験学習を実施する上でも着目していくべき内容である。

3-10 保育体験学習参加の高校生の意識

家庭総合の授業で保育体験学習を行った高校生を対象に生徒の実習に対する意識の変化をみるために実習の事前、事後に感想を記述してもらった。実習に行く前の気持ちとして「とても楽しみ」から「とても不安」までの5項目の中

から、実習に行った後の気持ちとして「とても楽しかった」から「つまらなかった」の5項目の中から該当するものを1つ選んで答えてもらった。実習前の気持ちとしては、図6からもわかるとおり、「楽しい」と「不安」の気持ちの割合にあまり差が見られないが、実習後では、「とても楽しかった」という割合が6割を超えていることが分かる。

教員側からの回答では、「短時間では、あまり効果がないのでは」という意識が多かったが、生徒の感想では、「とても楽しい」「とても勉強になった」という感想が多く、たとえ短時間でもたくさんのことが学べ、充実した実習となっていることがわかる。記述の中には、「この実習は、私にとってとても楽しいと同時に、とても重要で大切なことを学ばせてくれた」「子どもはあまり好きではありませんでしたが、思っていたことと全然違って、みんなすごく良い子ばかりで、印象が変わりました。」「子どもたちと過ごしていると、新しい発見もあり、面白かった。」「子どもと接する機会がほとんどなく、接し方に悩みましたが、わかったことは、子どもの目線で見ると話すということが大切だということです」「正直、子どもは好きではなかったのですが、この実習で考えが変わりま

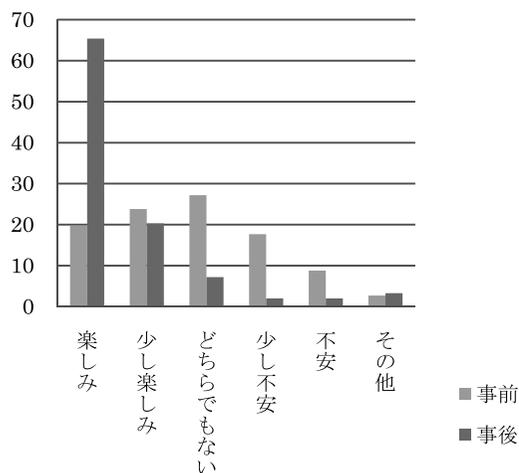


図6 実習に対する意識事前・事後

した。少しの時間でしたが、たくさんの表情を見せてもらいました。初めは、乗り気ではなかったのですが、今は楽しく貴重な良い経験ができたと思っています」

など書かれていた。短時間でも子どもたちと触れ合うことで多くの貴重な体験ができたという感想がとても多かったことから、短い時間だから効果がないということはないようだ。

4. まとめと今後の課題

今回の調査で、S県の家庭科における保育体験学習の実態と問題点、効果などを知ることができた。今までは、保育体験学習の有無についての数はわかっていたものの、今回のような実態の詳細はわかっていなく、各学校の家庭科教諭の保育実習に関する具体的な内容、取り組み方、問題点、効果などの記述は大変参考になり、貴重なものとなった。

受け入れ側である保育者の感想や実習に参加する生徒側の感想を見ていくと、保育体験学習は、送り出す教員側の不安や困難さ、問題点も多いが、それ以上に効果の高いもので、実習参加の高校生だけでなく、園の子どもたち、引率教員、幼稚園教諭、保育士のそれぞれが互いに新たな発見をして、成長しあえる場となっていた。

今後は、高校だけでなく必修化された中学校での保育体験学習との情報交換、連携も考えていく必要がある。また保育者の受け入れ後の感想と参加高校生の感想を取り上げたが、高校家庭科教員が受け入れ園の保育者側の感想にも着目したうえで、より効果的な保育体験学習について検討していくことが求められる。

謝辞

お忙しい中、調査をご理解いただいた埼玉県内高等学校の校長先生、ご協力くださった家庭科ご担当の先生方に感謝申し上げます。

引用文献・参考文献

- 伊藤葉子：中・高校生の家庭科の保育体験学習の教育的課題に関する検討 日本家政学会誌 58 No.6 315-326 (2007)
- 吉川はる奈、金子京子：中学生と大学生を対象にした保育学習における実践的研究 埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要 6 171-179 (2007)
- 中嶋明子、砂上史子、日景弥生、盛玲子：高校家庭科における保育体験学習者の意識変容（第1報）保育体験学習者の意識変容過程の構図化 日本家庭科教育会誌 46-4 351-360 (2004)
- 砂上史子、日景弥生、中嶋明子、盛玲子：高校家庭科における保育体験学習の意識変容（第2報）日本家庭科教育学会誌 48-1 10-21 (2005)
- 渡貫由季子、武藤安子：高校生における保育観の形成とそれに影響を及ぼす要因 自我発達の関連で 日本家庭学会誌 55 (2) 135-144 (2004)
- 鎌野育代、伊藤葉子 子どものイメージと自己効力感の変容からみる保育体験学習の教育的効果 日本家庭科教育学会誌 52-4 283-290 (2010)
- 滝山桂子 保育学習に関する中学生・高校生・大学生の意識と課題 日本家庭科教育学会誌 42-3 47-54 (1999)
- 室 雅子 中学・高校での乳幼児接触体験と保育教育の果たす役割 家庭科教育研究所紀要 21 75-85 (1999)
- (2010年3月31日提出)
- (2010年4月16日受理)

Educational Assignments concerning Childcare Learning Activities in a Home Economics Curriculum

Chizuru OJIRO and Haruna YOSHIKAWA

Keywords : childcare learning, experience in early childhood education, senior high school students, high school home economics

The aim of this study is to clarify the educational assignments concerning childcare learning activities in home economics curriculum. The questionnaire survey is held and 60.3% senior high school home economics teachers replay. As a result, the following four points are found out on the educational assignments concerning childcare learning activities in a home economics curriculum. 1) 53% senior high school home economics teachers hold childcare learning activities. 2) They don't have enough time for pre - and — post - learning especially discussion with high school students. 3) they ask for the support of the school and kindergarten and nursery teachers. 4) Kindergarten teachers comment the educational effectiveness of childcare activities.